

ある時、小和田甲斐守、不忠の事あつて出仕無用と仰せ付けられける。その後、御免下され、罷り出候えと召せども参らず、ひとえに身の榮華に誇り、甲斐守心に思うよう、何となく盛末を讒言して、我押切の城代せんと、つねづね謀を廻しけるが、湊へ馳せ登り御前に畏り、此の度我主人盛末こそ君の御恩を忘れ、反逆の企て候、その子細は、後の方をば堀を構え、自然の時は船に乗り軍せん、とて船ども多く用意仕り候なり、某、さまざま御異見申し候えども、更に御用い候わず、あまつさえ 刺御意背く奇怪なり、とて出仕留められ候也、事急に候、御用心候え、とて誠しやかに偽りけるこそうたてけれ。

愛季公聞こし召され、全く盛末は左様の不忠の者とは思わざりける、と仰せける。甲斐守畏つて、さん候、父にて候兵庫守・九郎殿に組し奉る時、君より御成敗仰せ付けられ生害に及び候事つねづね無念に思ひ候、それゆえこの度思ひ立ち謀反を企て候なり、御油断成され候な、と誠しやかに申したるこそ愚かなれ。

三浦五郎盛末、湊永覚町にて討たる事

されば愛季公、甲斐守が甲す所讒言とは思し召さず、五郎は正しく逆心の末とは思えども、召し返し相違なくいたせしに、何の不足あつて、か様に治まりたる代に、万民を悩まし、己が心の儘振

舞い前代未聞の者かな、早速罷り向かつて成敗仕るべし、時に甲斐を召され、汝、押切の案内を能く知つたらん、急ぎ馳せ向かつて、速やかに五郎追討せよ、と仰せける。小和田畏み思ひけるは、五郎殿、我が手に掛け討ち奉らば人の見る目もいかがあらん、と謹みて申し上げるは、仰せを背くに似たれども、あの押切の案内よく存じ候えども、我等がようなる侍五十騎百騎にては、なかなか思いも寄られず、同じくは、か様に治まりたる世の中にこの乱出候わば、人民の難き、百姓の難儀に及び候わらぬ、唯何となくこの所へ召し寄せられ、道にて待ち受け、打ち取り候わば然るべし、と畏つて申しける。

君聞こし召され、実尤なり、さらば湊永覚町の辺にて打ち取るべし、とて則ち御使に長谷川源八郎に仰せ付け、押切の城へ急ぎける。さて、甲斐守は打手の大将として兵どもに鎧・長刀・弓・鉄砲を持たせ三十騎余り引き具し、頃は十二月二十七日の事成るに、永覚町の辺に立ち隠れ、五郎殿の御出、今や遅しと待ち居たる。

さるほどに、源八郎は押切に成りければ殿よりの御意にこの度少々内談の儀之ある間、急ぎ出られ候え、との由にて某罷り越し候、と申しける。盛末、畏つて押付け参上仕るべく候、と使は湊へ帰りける。

その後、五郎殿湊より内談の事ありて御使者給わり候なり。急ぎ支度仕れと、則ち薄浅黄の直垂